

発掘調査の概要

旧大乗院庭園の調査（平城第352次）

平城京の東の京極にあたるかつての七坊大路を興福寺から南に下ると、荒池、そして右手に奈良ホテルのある鬼籠山（飛鳥山）をへて、国の名勝に指定されている大乗院庭園があります。

平城宮跡発掘調査部では、この庭園を管理する（財）日本ナショナルトラストの委嘱を受け、復原整備に向けた資料を得るために、1995年から継続的な発掘調査を実施してきました。これまでの調査は東大池の周囲を中心に南岸から東・北岸へと進めてきましたが、1999年度の第310次調査からは西岸部を対象としています。文献や絵図による研究から、この場所には変化に富んだ景観をもつ「西小池」のあったことが知られていました。けれども、西小池は明治時代の前半には埋め立てられ、地上から姿を消してしまっていました。そのため、発掘調査による実態の解明が期待されたのです。

今回の調査は、西小池のうち南池の想定地と東大池との間の築山を対象に、2003年1月7日から開始し2月末現在ほぼ終了しています。2月22日には現地説明会をおこない、多勢の方に現地を見ていただきました。また、調査期間中には大乗院庭園文化館において「大乗院の歴史を掘る－十年間の発掘調査の成果から」展が開催され、好評を得ることができました。

さて、大乗院は、一乗院とならび両門跡とよばれた興福寺の門跡寺院です。その起源は平安時代にさかのぼり、当初は興福寺の北方、いまの奈良県庁のあたりにありました。治承4年（1180）、平重衡による南都焼き討ちによって罹災したため、元興寺別院の禪定院がおかれていた鬼籠山の南麓に移り、ここを大乗院家と定めました。室町時代の宝徳3年（1451）、徳政一揆による焼亡後の復興では、尋尊大僧正によって、建物ばかりでなく庭園についても精力的な整備がおこなわれ、南都随一の名園となります。このとき園池の造営にあたったのは、名匠とうたわれた善阿弥親子でした。善阿弥は足利義政に仕えて銀閣寺の園池を造ったとも言われています。室町時代の整備では、東大池の北と南にある中島に西側から橋を架けたり、大池の西側にあらたに小池が造られたりしました。江戸時代の姿は、興福寺所蔵

の『大乗院四季真景図』等からうかがい知ることができます。

昨年度の調査からは、『四季真景図』に加えて、1939年に『庭園』・『風景』誌に紹介された平面図と検出遺構を重ね合わせることで、遺構の比定、あるいは発掘前の推定を試みています。事前の予測では、今回の調査地には、西小池南池の北岸および東岸、『四季真景図』に「ヲシマ」と記された中島の東半部、および「ヲシマ」から「連ナリハシ」によって結ばれた小島と対岸部、東大池と西小池を結ぶ流路の西岸にあたる嘴状の岬などが存在するものと考えされました。調査の結果、これらの遺構をほぼ予測された位置で検出し、同図の資料としての正確さをあらためて確認しました。

かつて奈文研におられた庭園研究者の森蘿さんおさむは、『中世庭園文化史』（奈文研学報第6冊 1959）のなかで西小池の復原を試みています。そのとき森さんは、ヲシマから連なる小島と嘴状の岬のありかたについて、3つの中島を石橋で連絡しつつ出島状とし、筋違いに州浜を突出させる姿が、京都にある桂離宮の松琴亭前の天橋立と州浜の意匠にたいへんよく似ていることを指摘していました。今回の発掘調査は、その情景を百数十年ぶりに再現することとなりました。

（平城宮跡発掘調査部 次山 淳）



調査区全景（南から）

手前が州浜状の岬、奥左にヲシマ